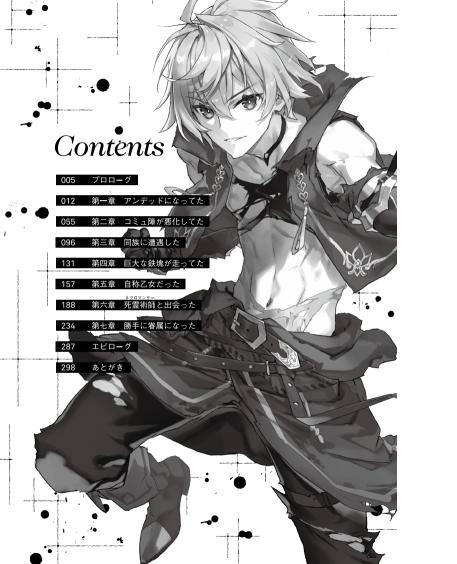
ただの屍のようだと言われて幾星霜、 気づいたら最強のアンデッドになってた

九頭七尾





*・オブイジント サリリナ

5

口 口

「はあ、

は (あ.....

息が苦しく、 はあ、

全身が鉛のごとく重い

0

まるで自分の身体ではない

か

のようだ。

く.....そ..... ずしゃり。嫌な音が鳴った。

もう限界だ。 気づけば俺は硬い地面に倒れ込んでいた。 石と砂の独特なにお いが鼻を突く。

ほどの傷を負っており、もはや治療もままならない状態だろう。 ポーションはとっくに底をついた。 11 や、 たとえまだ持ってい たとしても、 内臓に届く

危険な魔物が無数に徘徊している中を、俺は僅かな可能性を信じて何時間

すら難しい

地上は遠く、

「……俺の人生……何だ、 ったんだ……」

も歩き続けてきた。だがそれもここまでのようだ。もはや歩くどころか、

立ち上がること

呆気ない人生だった。

ジオンは辺境の小さな村で生まれた。

貧乏な村だったが、それなりに幸せな幼少期を過ごしたように思う。

だがあるとき冒険者に憧れ、 村を飛び出した。

都会で冒険者になったはいいものの、生来の人見知りな性格の 11 もあって、 なかなか

V い仲間に恵まれず、ほとんどの依頼をソロでこなしていった。

11 自分で言うのもなんだが、 恐らく才能があったのだろう。順調 冒険者ランクを上げ

新人冒険者が百名いたとして、 った俺は、気づけば二十歳という若さでBランクとなっていた。 そのうち三人が到達するかどうか。

それがBランクである。

相当な努力家か、 一部の特別な才能を持つ者にしか届かな い領 域 な めだ。

……それで己の実力を過信してしまったことが、 運の尽きだったのかも

難易度の高いダンジョンにたった一人で挑んだ俺は、 魔物の猛攻に幾度となく遭い、

そしてこのザマである。

「も……うまれ……わった、ら……」

もう声も出ない。段々と視界が暗くなってきた。

し生まれ変わったなら、 0,1 次はもっと堅実に生きよう。 時にバカ騒ぎして、

語り合って……。

できれ

ば外交的な性格がい

友人をたくさん作って、

もちろん最期は、 こんな孤独な死に方じゃなくて、 家族に囲まれながら幸せな笑顔で死

んでいきたい

こうして俺は死んだ。

.....はず、 だった。

「おい 人が倒 れてい ・るぞ」

「本当だ。 早く 助けないと」

そんな声で、 俺の意識は再び覚醒した。

複数の足音がこっちに近づいてくる。やがて俺の目の前までやってきたのは、

冒険者と

思われる四人組だった。

男二人は剣士と斥候のようだ。 バ ランスの 11 V パ テ ノイだな。 残り二人は女で、 ソロの俺とは違う。 それぞれ魔法使いと治癒士だろうか。 きっとこの危険なダンジョンでも、

安定して探索を進めることができるだろう。

それはそうと、 なんて幸運だ。 この広大なダンジョンの中で、 まさか偶然にも他の パ

ティに遭うなんて。

助けるどころか、トドメを刺 しかも俺のことを心配 してくれてい して金目の物をすべて奪って る。 ダ 5 ジョ ン で 死に 11 かけ くよう の冒険者を見つけ 11 同業者もいると 7

聞くし、本当にありがたい。

……いや待て。何か様子がおかしいぞ。

ポーションを使おうとした剣士の男を、 治癒士 一の女が 止 8 たのだ

「……残念だけど、助けることはできないわ」

「なぜだ?」

だって、これはもう、ただの屍よ

ただの屍、だと……?

治癒士の女が言い放った言葉を、 俺は理解できなか いった。

そんなはずはない。だって俺はまだ生きている。

現に、俺はこうしてお前たちを見ているし、 その Þ り取 Ŋ を聞 13 7 いるじゃ ない

「私たちにできることは一つだけ……。 アンデッド化してしまわないように浄化してあげ

ることよ。……もうすでに、そうなりかけているわ」

う、嘘だろう……。

じゃあ何か? 俺の肉体はもう死 んで 11 て、 魂だか霊だか知らな 13 が、 そんな状態で彼

らの話を聞いているってことか?

ドオオオオオオオオオオオンツ

そのとき突然、 上の方から 物凄 V) ・音が響 V3 てきたかと思うと、 地面が大きく揺れ

「な、何だ……っ?」

「地震かっ?!」

「ダンジョン内で?!_

四人組が慌て出す。 しばらく経っても振動 は 向 に収まらない。 それどころか天井に亀

「ほ、崩落するんじゃないか……?」裂が走り、パラパラと石や土が降ってきた。

「冗談じゃねえぞ!!」

「は、早く地上へ!」

彼らは一目散に走り出した。もちろん俺を置

9

おい おい 待っ てくれよ! このままじゃ 、生き埋 めに 13 もう死んでるんだ

1

て。

11

10 つ

のだった。 そう考えるとあまり怖くなくなってきた。 やがて本当に天井が崩落する。 迫りくる石の壁を、 もうどうにでもなれ 俺はただぼんやりと眺めながら迎え って感じだ。

\Diamond

その日、 大陸西部に覇を唱えるエマ リナ帝国に激震が走った。

したのだ。 頂点に君臨するとされる二体のドラゴ ツェが、 エマリナ帝国の領空内にて激突

かった。 炎と氷の雨 が降り ジ注ぎ、 台風 のような暴風が 吹き荒れる。 それはもはや天災に他ならな

二位の都市として知られてい 幾ら大国と言え、 この二体 た大都市 の前には 成す バルカ 術も バ は消 ない 0 壮絶な戦闘 それどころか、 0 余波を受け 周辺一帯の 帝国

天候が変わったほどだった。

炎帝竜が墜落 力の大半を失って空を飛ぶこともままならず、 敗北した氷皇竜は、炎帝竜に喰い尽くされて死体すらも残らなかったという。 やがてその頂上決戦も勝者と敗者を生み出して終結した。 勝者である炎帝竜もまた瀕死の した場所。 それこそがまさに、 状態であった。 とある冒険者が死亡したダンジ そのまま地上へと落下し てい 3 った。

アンデ ッドになってた

0 た炎帝竜の膨大な魔力。 氷皇竜を喰ら い尽くし、 ラゴン 0 11 あらゆる生物の頂点とも言うべき存在とな

ことができた。 運よくそれを丸ごと吸収することとなったそのダンジョ ン は、 途轍もない発展を遂げる

そんな場所で生まれた、 _ 体のアンデ ッ

成長を、 理性など持たないそれは、 そして ^進化』を続け しかし生前の肉体が優秀だっ た のか、 他の魔物を倒

 \Diamond

あれ? 何してたんだっけ……。

薄暗い洞窟めいた場所に、 なぜこんなところにいるのかも、ここがどこなのかも、 気づけば一人でポッンと突っ立って まったく分からない。 いた。 困惑の

まり、 俺はすぐ隣にあった壁に手を突く。 ぬるっとした不思議な感触を覚える。

っ !?

俺は思わず身構えた。

これは壁じゃない。よく見ると、石畳のような鱗がびっしりと生えてい

蛇の魔物だ。 それも恐ろしく巨大な蛇が、俺の傍に横たわ っていた。 直径が二メ

近くあるため、 最初はただの壁のように思えたのだ。

全長はたぶん、百メートルはあるだろう。

災害級とされるブラッドサイザードックス この化け物は……? ーペントでさえ、こんなに大きくないはずだ。ちなみに災

害級は、小規模な都市に甚大な被害を与える脅威度の魔物に設定されるものだ。

度なのだが……この蛇、下手をすれば大災害級かも……? その上位の大災害級ともなると、 大都市、 あるい は国を丸ごと壊滅させるほどの脅

おいおい、 こんなのに襲われたら一溜まりもないぞ。

13

まったく動かないところを見るに、 もしかしたら寝ているのかもしれない。 今のうちに

逃げるしかな

俺は物音を立てない よう、 恐る恐る蛇から距離を取っ てい った。

ぐに分かった。 だが少し離れ たところからその巨大蛇を見てみると、 逃げる必要などなかったことがす

頭が潰れていたのである。 _ 体何が起こったのか分からないが、 これでは生きているは

ずがない。

「おえあ……」

助かった、 と言おうとして、 しか し実際に口 から発せられ たのは奇妙な音だっ

おかしい。どうやって喋るんだっけ?

「あー、うー、えー」

しばし発声練習をしてみて分か かったが、 どうやら喉に異常があるわけ ではなさそうだ。

に久しぶりに声を出したので、 上手く発声できなかっただけらし 13

……久しぶりに?

その言葉に疑問を抱きつ つも、 感覚的にはしっく 'n **全てしまった**

薄っすらとではあるが、少しずつ記憶が、蘇ってくる。

俺はこの薄暗い洞窟、 11 や、 ダンジョンで致命傷を負い、 そして死んだはずだった。

だがこうしたダンジョンのような場所で死んだ人間の肉体は、 時にアンデッド

き出すことがあるという。

どうやら俺もそうなってしまったらしい。

そして永遠とも思える時間、 ひたすらダンジョンの中を彷徨い続け てい たの

しかもアンデッドと化して理性を失った俺は、その本能に従うように延々と魔物

魔物を倒し続けた。

微かにだが、そのときの記憶が頭の片隅に残っている。

……そうだ。この目の前で死んで V る巨大な蛇。 俄かには 信じがたいことだが、

も俺が倒したような気がする。

した直後、 なぜか全身に力が 張翁 ってくるような感じがあっ て.....

「どう、なって、る……?」

まだちょっと声がおかしいが、 さっきより Ú マシになっ

た俺がなぜ、再び自我を取り戻したんだ? しかし、そもそもこうして言葉を発してい 当然だが、 ること自体が奇妙な 普通こんな風に思考できるはずも のだ。 ア ンデ ッド

ない。まさか、俺は生き返ったとでもいうのか……。

幾つもの疑問が浮かび上がってくる。

だが今の俺が望むものはただ一つだけだった。

早く死にたい。

い続 け τ̈́, 疲れ たの

アンデッドなので身体に疲労感はまったくない。ずっとダンジョンを彷徨い続けて、疲れ果てたの 痛みもな

だが精神は疲弊し、摩耗し切っていた。

の眠 りに つきたか った。

……その割

に足が驚くほど軽

11

が

俺は今の気持 や生へ の執着などない .ちを表すような緩慢さで歩き出 0 一刻も早く 永遠 した。

しばらく歩き回って発見 したの は、 とあるトラップ ,だった。

腹立たしい

見たところ、 周囲と変わらないただの地面である。 けれどそこがトラッ プに なっ

ことを、 なぜか俺は察知することができた。

「……これ、なら

俺は自分からその場所を踏 み つけ Ź. す んと次 0 瞬 間、 地 面 が消 美し

落とし穴だ。 一瞬の浮遊感の後、 俺は真っ暗闇へと落ち Ť くろ

穴の奥には剣 山が仕掛けら てい この勢いであれが身体に突き刺さったら、

とができるかもし

す でに死んでい る身なので、 死ぬと表現する のは奇妙だが。

不死身というわけではないはずだ。

頭を破壊され

なくなる 浄化魔法を喰らったら消滅する。

しかしアンデッドと言えど、

俺はゆ つくりと目を瞑り、 そのときを待った。

ペキンッ! 金属が折 れるような音が響いた。 その 直後、 勢い よく頭から地 面 叩た

つけられる。

だがまったく痛みを感じなか った。

目を開けて周囲を見回すと、近くに剣 Ш 0 一部が落ちて 61 た。 どうやら俺が

とで、 半ばからぽっきりと折れてしまったようだ。

俺の身体には傷一つなか った。 地面にぶつか つ た頭 を触っ てみても、 まっ

無傷である。

と いうのに、そもそも怪我を 単に痛覚が麻痺 してしまっ していないのだ。 ているとい うだけ ではな 1/1 あ れだけの高さから落ちてきた

どういうことだと首を傾げ 0 つも、 ともかくこの穴の底に

11

てもどう

俺 は穴から出ることにした。 っ掛かり がほとんどなか ったので、 僅 かな凹凸に指をかけて登り始めた。 すると

て 意外にもすい ない。 すいと進んでいき、 気が付けば穴の外へと脱出してしまう。 息一 つ荒くな

身体能力がお か L 11 ... 自身の状態に困惑し T 17 るときだった。

「グルルルル……」

穴から出てくる俺を待ち構えてい たかのように、 匹 \overline{O} 魔物が近づいてきた。

熊の魔物だ。 体長は四メー トルほど。 その全身を覆うの は毛ではなく、 高質化

ような分厚い皮膚である。

俺は頭の片隅で、 その名を記憶して 61

ムドグリズリー。災害級とされる危険な魔物だ。

この巨大な熊は、並の攻撃では傷一つ付かない圧倒的 な防 御力を持つ。 それ でい

先の爪が名工の打った剣のような切れ 味を誇っている。

すなわち、 攻撃力をも併せ持つという恐ろしい魔物な 0 で ある

しかも、よくよく見てみると、 通常の腕に加え、 脇腹辺りに二本、 また別の腕を有

じて

上位種か、あるいは変種かもしれない。

トラップでは駄目だったが、この凶悪な魔物に襲 わ n ればさすが ĸ 死

正直、 飛び降りと比べると嫌な死に方だが、 この際どうでもよかった。

「グル……

か、 だがどういうわけか、 こちらに顔を向けたままゆっくりと後退っ V つまで経 つても 一向に襲い 7 11 る。 かかか つ てこない。 V それどころ

.....警戒し てい るのか?

んな強くて狂暴そうな魔物のくせに、 随分と用 心深 1/7 んだな。 過去に 油断

11 確かに魔物からすれば、人間の見た目なんて差が かかり、 痛い目に遭わされたことがあるのかも しれ な 11 か な ?らな。

さすがにこっちから近づけば、反撃してくるよな?

そう考えた俺は、 ムドグリズリー -に向か 0 7 11 つ

自らアー

すると意を決したような雄 温 い び を 上 げ、 ŋ か か 0 ってきた。

迫りくる四本 \dot{o})剛腕。 俺はただその場に突っ立って、 それが自らの身体を粉砕する瞬

ドンつ。 は 想像 してい た百倍は 小さなも のだ 0

どころ か、 の幹のように太い まったくダ Ŕ 四本の ジを受け 腕に思い切り挟み込まれたというの なか ったのだ。 俺の身体 は

「グル

ル

ルル

ウ(

ッ !?

いた。痛そう……。 逆にアームドグリズリー の方が痛がっている始末である。 よく見ると、 爪が

慌てて踵を返すと、 アー À k ゲ ij Ź 11 猛スピ ードで去って

やがて暗闇の奥へと消えてしまった。

た.....?.

その後も俺は何度か魔物に遭 遇

いずれも災害級、 あるい はそれ以上のヤ V 魔物 ば か ŋ

どうやらこのダンジョンには化け物しか いな いら しい。

俺がまだ生きていた頃は、 ここまで危険なダンジョンでは なか たはず

そうでなけ れば、 最初からソロで探索しようなどと考えない。

だが何よりも驚くべきなのは、 そうした凶悪な魔物たちと遭遇しなが 5

もダメ ジを負ってい ないということである。

「どう、なってる……んだ……?」

そもそも俺と遭遇した魔物の大半は、 こちらを見るなり 怯え、 逃走し

そ

そして襲いかかってくるごく少数も、 自分の攻撃がまったく効かないと知るや、 しまう。

ドグリズリー と同様すぐに逃げて いくのだ。

さらにどんなトラップも効かなかった。

されても、 毒を浴びせら れても、 大爆発をまともに喰らっても、 俺はまったくの無傷なの

落とし穴だけでなく、

天井の崩落で生き埋め

である。

「ちょっと……強すぎない か……この 身体

俺は一刻も早く死にたいのだ。

なのにこの頑丈すぎる身体のせいで、どうし ても 「死ぬ」 ことができな

そうして途方に暮れかけていた、 そのときだった。

つ、

ダンジョンの出 口を発見したので あ

生きていた頃なら、 無事に生還できたことをどれほど喜んだことだろう

しかし生憎と俺は死に、アンデッドとなってしまった。

それでもようやくこの薄暗 い穴倉を脱出できることに、 俺は少なからず高揚して

なにせ久しぶりに光を浴びることができるのだ。

からアン ・デッド 待てよ……? -の多く は、 今の俺はアンデッドだ。 夜間やダンジョン、 薄暗い森などにしか現れな ア ンデッド は太陽の光に 13 弱 いと聞 0) であ る。

俺も し長時間に わたって太陽光を浴び続けると、 ない 消 滅してしまうと言われてい

例外ではないかもしれ

むしろ、 望む、ところだ……っ!」

そうだ。俺は死にたいのだ。太陽の光で死ねると 13 ・うの なら好 都合で

俺はつい走り出し、 空から降り注ぐ眩 13 陽光の中 へと身を躍らせた。

-----うん**、** 痛くも痒くもない……」

と照り付ける太陽光をまともに浴び ても、 まっ たく \dot{o} ダ メ ジ だっ

ずっと浴び ってい たら効果が出てくるのか もしれな 17 が、 少なくともこれ が弱点で あると

は思えないレ ベル で何ともない

見ると陽炎が起こっているので、 それにしても随分と強烈な日差しだな。 周囲はかなり ア シ の高温 デ ッド のようだ。 の身なので 今は真夏なの 分か りに Vi かもしれな が

ダン ジ 彐 ン · の 周 辺は見渡す 限りの荒野で、 草一 つ生えて 13 な L3

記憶は曖昧だが、 こんな場所じゃなかったはずだ。

確かダンジョンは森の 中に あったように思う。 俺が ア ン デ ッ としてダンジョ

周辺の環境が変化してしまったのだろうか。

なっ!?

俺がそれに気づいたのは、 ふと後ろを振り返っ てみたときだっ

ドラゴンの巨大な頭部がそこにあった。 と言っ ても、 残って 11 る 0 は 骨 格だけで、

ながらすでに死んでい る

ば 0 かり意識が向 頭部だったのだ。よく見ると天井 まさに今、俺が出てきたダンジョ 13 てい て気づかなかったらし からは鋭 ン の入り口 い牙が V 0 だ。 :何本も 洞窟だと思って 突き出 L そ 1, いる。 たそれが、 さっ きは外に -ラゴ ン

かない 頭部だけで十メートルはあ 外に出ているのは 頭の りそうだ。全長ともな 一部だけで、 身体 の方はダ ればどれ ほど ンジ 彐 の大きさなの ンと一体化 か するように ?想像も

完全に地面に埋まっていた。

「……このドラゴンに、 踏み潰され たら……さすがにこ の異常な身体 b

だろうな……」

ず ń ても、 俺の 記憶に残 るダンジ \exists ン 0 入 'n \Box は ځ h な 風で は

色々と疑問 の洞窟 は浮かぶが のような入り口だったはずだ。 しかし考えても分かるはずがな _ 体何 が起こったの

真 へっ黒い そのとき突如として周囲が暗くなった。見上げると、 雲に覆い尽くされようとしていた。 さっきまで雲一 つなかった空が

急な天候の変化に驚く間もなく、 空から大粒の雨が降ってくる。

毒き、 ザア 地上に稲妻が落ちる。 アアアアアツ! 先ほどまでの晴天が嘘のような凄まじい 豪雨 だ。 何 雷 鳴 が

俺は慌ててドラゴン にあっという間に幾つもの水たまりができて 0 口の中に避難 した。 この様子だとしばら 17 ζ, 11 8 水たまりとい くは止ゃ ま ない だろう。 b

すぐにダンジョンの入り口にまで浸水してきた。

はや池や湖だ。

足元まで水が来たので水面を覗き込んでみると、 そこに俺 0 顔 が .映っ 7

「これが、俺……?」

そこには雪のように髪が白く、 鮮血 のように目が 赤 い青 牟 の姿が 6

俺の髪はもっと黒かったはずだし、 目もこんな赤 くなか ったは じずだ。

これならたとえ人に遭遇したとしても、 だがそれらを除けば、 生前と変わらない。ごく普通の人間に見える。 アンデッドだとは思われない かも

その後も天気は目まぐるしく変わった。

今度は気温が上がっていき、そして雨も上がる。代わりに暴風が吹き荒れ、 急に気温が それもようやく収まると、 下がってきたかと思うと、雨が雹となり、 再び蒼天となって灼熱の暑さに。 やがて雪となった。 かと思えば、 あちこちで竜

なるほど、こんな環境では草も生えないはずだ。

異常な気候ではあるが、 ずっとダンジョンの入り \Box 13 ĺ٦ ても仕 方ない 0) で、 俺は

して荒野を歩き始めた。

「確か、近くに集落があったはず……」

かつて冒険者たちがダンジョンに挑むための拠点とし 0 中 に設けら れ、それゆえ魔物に襲われることも少なくなか て利用 ったが、 7 いた集落だ。 住人の大半が

に覚えのある者たちだったため、 11 つも難なく討伐していた。

「……ここか」

もちろん、その森すら 消滅 した今、 まだ存在 L そ いるとは思っ 7 V なか つたが

残っていたのは、集落を守っていた防壁 一の微か かな名残だけだ。

森だったはず それでも、 これで俺の記憶が間違 の場所だ。 つてい ないことが証明できた。 やは りここ か っ 7

それからさらに俺は荒野を歩き続け た。 微 か な記憶を頼 ŋ に 続 13 て俺が 目

都市 b Ō 人々 バ ル ・が暮ら ルカバ である。 してい この辺り一帯を支配する帝国の中でも最大級の巨大都市で、 た。

……まさかあ の大きな都市が 無く 、なっ てい ることはあるま 1/3

だろう。 徒歩で行くような距離ではないのだが、 それでも今の疲れを感じない 身体だり なら問 題な 1

空腹を覚えることもなけ ń 睡眠 す Ś も必要な 13 ようで、 俺は 夜通し歩き続けること

ができた。

伴い ダンジョンから離れ 、草木や魔物をちらほらと見かけるようになってくる。 ってい くにつれ、 少しずつだが異常気象が マ シになってきた。

しかし魔物は俺を見るや、 どいつもこいつも一目散に逃げて 11

向かってこない ダンジョンにいた魔物と比べると幾らか力は劣るようだし、 のかもしれない。こっちから攻撃する気はないんだけどな…… 本能で敵わ ないと理解

やがて目的の都市が見えてきた。

な姿へと変わり果てていたのだ。 都市を守護する巨大 な 城 竜 0 攻撃にも耐えると言わ れ ていたそれが今や、

無人の廃墟が延々と続い もちろん都市の中も悲惨な有様だった。 あちこち崩れ落ち、これでは野盗の侵入すら簡単に許してしまうだろう。 いている。 美しかった街並みは失われ、 ボロ ボ 口 になった

7 いたはずだ。 俺は見覚えのある大通 りに出た。 か 0 ては幾多の 商 店が ?軒を連 ね 大勢の 人 Þ で 賑い わ 0

だが現在は人っ子 一人見当たらない 0 11 いるのはア ゚ンデ ッドと化した俺だけ

そんな考えが脳裏を過った、そのときだった。

「まさか、人類そのものが滅びた……なんてことはないよな……?_

「おおおっ!

「喰ら いなさい つ! ファ Ź ーアジ ヤ べ 1] シ 2

どこか遠くからそんな声が聞こえてきて、 俺は顔を跳ね上げる

人? 人がいるのか……?」

俺は急いで声がした方へと走り出した。 身体が軽 13 0 て走ったが、 信じられ ほ

ど の速度が出てい る。

それでも五分ほどは走っただろう 俺は先ほどこんな遠くの声を拾ったのか? か。 随分と距離があったようだ。 あり 得ない 聴力だ。

引韋ハよハ。人間だ。見た或だ、冒食皆らしき国人用ともかく、俺はようやく声の主たちを発見した。

間違 だが現在は 彼らは魔物と戦っていたようだ。全長二メートルを超し、鋭い牙を有した猪。 1/1 両者ともに戦闘を中断しており、 人間だ。見た感じ、 冒険者らしき四人組である。 いきなりの乱入者 すなわち俺の方を注

冒険者たちの内訳は次の通りだ。

目

してい

る。

れる若い 最後に、 巨大な戦斧を手にした四十がらみの身体の大きな男。 三十半ばほどと思われる棍を手にした禿頭の男。 女。 たぶん剣士だろう。小柄で年齢の判別が難し それ あまり見かけな い男は盗賊 からこ 0) か、 中では最 ある い顔つきと武装 いは 年少 斥候か。

| | な……]

彼らは魔物との交戦 中に現れた俺を見て、 愕然としたように立ち尽くしてい

一方、猪の魔物はというと

「ブフゥッ?!」

見知らぬ四人の男女だけがこの場に残される。 そんな風に鼻を鳴ら したかと思えば、 猛スピードで逃げていってしまった。 結果、

ええと……ど、どうすればいい?

人間に会ったはいい が、どんな風に声をかけ てい のの か、 まっ たく分からな

生前ですら、 俺はコミュニケーションが苦手だったのだ。

てやアンデッドとなり、 ず つとダンジョ ンを彷徨い続けて v たのである。 上手く会

話できる気がまったくしない。

 \exists

戸惑い、 沈黙するし かな 11 彼らは彼らで、 怯えるような、 ある 11 は絶望するような

表情で身構えている。

そもそも相手は俺を危険な魔物と認識 L Ē Vi る ので は な 13 か

だとすると、友好的な会話など望めるべくもない。

そうだ。まずは挨拶だ。明るく元気に「こんにちは」と言えば、 ちゃんと言葉が通じる相手だと分かれば、少しは警戒を解いてく いや、水たまりに映ってい た俺の姿は、 あまりアンデ ッ K 5 Ĺ 13 b きっとい れるに違い のではな け るは ない。 か つ

俺は恐る恐る口を開いた。

「……こ……ちわ……」

っくりするくらい声 が小さか った。 だってまだ言葉を発するのに慣れ 7 11 な い

解してくれたに違い それでも挨拶は挨拶。 な L) 大きな一歩である。 これで彼らも俺が危険な存在ではない

ちょっ、反応なし <u>[</u>3 俺 ち ゃ んと挨拶したよな つ

むしろ彼らの表情はますます硬くなって いた。 かえって警戒心が高まったようにも見え

くつ、 一体何がダメだったんだ……?

そうか! 笑顔だー

ぼそぼそした小さな声だった上に、 俺は たぶ ん緊張 0 せ 11 で無表情だっ た。 れ 逆

効果となってもおかしくはない 0

俺は必死に表情筋を動かした。にこ~。

次の瞬間だった。 突然、戦斧を手にした男が 獣 のような雄 叫な びを轟か

「うおおおおおおおおおおおっ!」

て決死の表情で躍りかかってくる。

ええええつ!! せっかく頑張って笑顔を作 ったのに、 また逆効果 0

男が手にしているのは、常人なら持ち上げることすら難しいだろう、 巨大な刃の

それを俺の頭部へと振り下ろしてくる。

b しかしてこれなら死ねるかも?

そう思って避けなかったら、 見事に額に戦斧の刃が直撃した。 ばぎん つ

「つ!?

男が目を剝む रुँ 俺の 頭部を粉砕すると思われた一 撃だったが、 ħ たの 戦 方

だったのだ。 刃が砕け散 ったのである。 俺 0 方は い…やは ŋ 無傷

ば、 化け物っ……」

「アレク、退いてっ!」 男は引き攣った顔でそう小さく呟く。

法の杖のように掲げ、 彼の後ろからそう叫んだのは、 頭上に巨大な炎塊を作 剣士らしき少女だ。 り出して ٠٨ :: いる。どうやら魔法剣士ら よく見ると彼女は剣を

メテオファイアっ!」

炎の塊がさながら隕石のように、 真‡ つっ直す 一
ぐ
俺 のところへ 、降って きた。

ズゴオオオオオオンッ! 直擊。 そして猛烈な炎に全身を焼かれる俺。

゚ッド モンスター は総じて火の魔法に弱い。 物理攻撃はまったく効かなか

31 これならある 1 は

「……ぜんぜん、 熱く ない

単に痛覚を失っているわけではなく、身体は火傷一つ負っていない 身体を覆い尽くすほどの炎に焼かれているというのに、まるで熱くなかった。

「つ……あたしの全力の魔法が、 無効化された……っ ?: 」

女魔法剣士が驚愕の声を上げる中、俺は背後に微かな気配を感じて振 り返 5 た。

そこにいたのは、 小柄な男。猛禽類のように目を光らせながらも、 無表情の中に極限ま

で殺意を押し込めている。手にはナイフを握っていた。

ナイフというよりも暗器の ・針、に近いものだろう。

それを俺の眼球目がけ、躊躇なく突き出してくる。手慣れた殺しの技だ。 ばき 0

しかし眼球にぶつかるや否や、、針、 が折れた。 ……俺の目は無傷だ。

「馬鹿、 な.....

無表情だった男の顔に驚愕が浮かび上がった。

煌々とした光に包まれた棍を、俺のすぐ目の前で振り下ろした。 禿頭の男が何やらブツブツと呪文めいた言葉を発しながら飛びかか ってくる。

「滅せよ! かああああああっ!」

凄まじい閃光が弾け、 俺の身体を覆い尽くす

びりつ、 ೬ まるで静電気が走ったような、 初めて微かな痛みを感じ、

体を震わせた。 だがすぐに何事もなかったかのように光が収まる。

「……これが、 効かぬとは……」

禿頭の男が愕然としたように呟く。

「マジか……高位ア ンデ ッドすら浄化する、 ガ 1 0) がま つ たく効い 7 ねえなんて

:

「な、 何なのよっ、 この 化け 物は……っ?」

.....絶望、だ」

他の三人も信じられ んないとい った顔で呻 1/2 って いる。

どうしよう? まさかいきなり攻撃されるとは思って いなかった。

まだ今からでも友好的な会話ができるかもしれない。

しかし幸い俺は無傷だ。攻撃されたことは事実だが、

俺がそれを許してやりさえすれば

たが、 そのために、まずは怒っていないことをアピールする 今度こそ笑顔の力を借りるべきときだ。にこ~。 しか な 13 先ほどは失敗に終わ

0

ひい . つ

……怯えてんじゃ

٤ そのときだ。 戦斧の大男が意を決したように懐に手を突っ込むと、 何やら不気味

このとき、

俺は初め

な光を放 つ結晶のようなものを取り

一か八かっ、 こいつを使う……っ

そう決死の表情で叫ぶと、結晶を俺に向かって投げつけてきた。

リンッ! 俺のすぐ足元で結晶が割れる。すると次の瞬 間 空間が歪んでしまったか

のように、 目 の前の光景がぐにゃぐにゃと曲がって見えた。

?

何らかの攻撃をされたのか。だが 相変わらず身体 こには何 の異変も

ケンタウロスの下半身が、小羊に変異したような姿だ。グネグネと捻じ曲がった二本の しかし空間が元に戻ったとき、 11 つの間にかそこに大きな影が出現していた。

蝙蝠のような漆黒の翼を有しており、全身は真っ赤な毛で覆われている。

どうやら先ほどの結晶には、 何かを強制的に召喚する魔法が込められていたら

「こいつは……悪魔か……?」

邪神によって生み出され、 異界に棲息すると言わ れる邪悪 な種

それが悪魔だ。 個体差は大きい が、 一般的に頭部 の角と漆黒の翼が特徴で、 また総じて

い能力を持つ。 下級の悪魔ですら、 熟練の 冒険者が苦戦するほどだった。

ウオオオオオオオオッ!」

悪魔には高 無理やり呼 い知性を持ち、 び出されたことへの怒りを示すように、 会話が成立するタイプの個体もいるが、 悪魔は凄まじい雄叫びを上げ どうやらこい つはそ

とは真逆の個体らしい 0

って、あい

つら逃げ出してんじゃ

よく見るとあ の四人組はこちらに背を向け、 全速力で逃走し そ

11

悪魔を呼び出しておきながら放置するとは何事か

もしかしたら召喚するだけで、 コントロールすることができな いのかも しれ

お陰で悪魔の怒りの矛先は俺に向いた。 てこのまま攻撃を受けることに抵抗を覚えた。なぜなら悪魔に倒さ 四本足で地面を蹴り叩 けき、 躍り かかってくる。

れた者は、 その悪魔の眷属にされてしまうと聞いたことがあるからだ。

死ぬのはい V が、 眷属になどなりたくない。そう思った俺は、 思わず迫

n

لح

拳を突き出していた。

バアン ツ ! 悪魔と俺の拳が激突した瞬間、 凄まじ い破裂音が 轟 13

破裂したの は悪魔の下半身だった。 血と臓物を周囲に巻き散らしながら、

なった悪魔が頭から地面に倒れ込む。

その

那

悪魔の顔が驚愕に歪んで

いたの

がチラリと見えた。

……いや、俺だってびっくりだよ。





俺の名はアレク。Bランクの冒険者だ。

十七の時に冒険者になり、 それからすでに二十五年。

むしろ元気になっているほどだし、力もスキルも成長し続けているのを実感していた。 今年で四十二歳になったが、しかしまだ引退する気はさらさらない。身体は若い頃より

何より俺は今のパーティをいたく気に入っている。

……変わった連中ばかりではあるがな。

「これほどの都市も、 いことか……。 ああ、これぞ無常……」 やはりいつかは滅びるのだ……。人の作り上げたものの、 なんと

そうブツブツと独り言を呟いているのは、俺よりも頭一つ以上も小柄な男。

に饒舌になるクセがある。 パーティメンバーのディルだ。普段は無口で無表情な男なのだが、感傷的になるとやけ

元々はとある国で、要人などを秘密裏に殺すための暗殺者として育成されていたという。



紆余よ あってその国を脱出。 新たに冒険者として生きていたとき、

暗殺者とし 年ほど前 て鍛えら のことだ。 れた戦 それ 以来、こうしてずっとパ () ア 1 を組 h で V ても活

て 11

度の魔力のせ 「見ろ……部屋の中に当時の 11 か、 何百年も 経た 、ものと思しき死体が転がっているぞ……。闘能力の高さもさることながら、斥候とし っているというのにほとんど腐敗していない……。 周囲に満ちる高濃

ぜひとも持ち帰らねば……」

「それだけはやめてくれ

俺はすかさず制した。 ゛ディ ル には死体を見るとやたらと興奮 すぐ

る悪癖があった。

エマリナ大荒野、へと来ていた。 ちなみに現在、 俺たちの パ テ イ はとい 世界でも有数の 魔境とし 知ら

は広大な荒野と化している。

遥か昔、エマリナ帝国と呼ばれる大国が

あ

ったとされる一

帯だが

どうい

う

わ

延々と続く異常気象のせいで、 現在は人の 住 めるような場所で は な

そして凶悪な魔物も多数棲息している危険地帯だが、 貴重な遺産が眠っ て 13 ることもあ

つ 俺たちのような高位冒険者が調査を進めていた。

建物の多くは風化してボロボロになってい 中でも今、 俺たちが探索しているのは、 当時、大都市だったと推測され いるが、 それでも かつての繁栄ぶりが伺える。 る場所だ。

「不思議なことに、 死因の大半は焼死と凍死らし 1, な。 何ら か の災害に遭ったの か、

やら短時間の間に一斉に亡くなったようだ」

「焼死と凍死って、 どうやったら同時に起こるのよ?」

そう俺に噛みついてくるのは、 うちの紅一点、そしてパーティ最年少の ハンナだ。

年齢はまだ十九。それ もあって、パーティ内では一番低 いヒラ ンクであるが、 その実力

はすでにBランクに勝るとも劣らない。

実は彼女は、 かつて俺とパ ーティを組んでいた剣士と魔法使い の娘 で

二人とも凄腕 の冒険者だったが、結婚を機に引退。 そしてハンナが生まれた。

法剣士だった。 の才能を余すところなく受け継 いだらしく、 彼女は剣も魔法も得意な、 わ ĺФ

1/3

両親 から猛反対を受けたので、 頃から両親に憧 れて冒険者を目指して 喧嘩して家を飛び出 いたが、 したというなかなかの いざ冒 険者になろうとすると、 お転婆娘でもあ

39

る。

まるであたしが何も考えてないみたいに言わないでくれる?」

少しは自分の頭で考えろ」

色々あって、現在は俺のパーティに加入していた。

方がかなり先輩のはずなんだが、まったく慕われている感じがしない。 小さい頃は 可愛かったのだが、 反抗期なのか、今ではすっ か りこんな調子である。

「——南無」

る体格の持ち主である彼は、 顔の前で手を合わせ、 神妙に祈りを捧げて ガイと言った。 V る Ō は 禿頭 0 大男。 戦士である 匹敵す

が、同時に棍を使った接近戦も得意としており、 ガイは元々、 東方の国で聖職者をしていたらしい。 攻撃と補助 その ため治癒魔法に の両方を高い レ 長だけ ベ ル 7 で熟すこ Vì るのだ

とができる。

彼とは数年前に出会い それ から _ 緒に 一冒険を続 it Ź 1

何やら過去に色々あって、 聖職者を破門されたらし 61 それで西方に流れ着き、 冒険者

を始めたのだという。

「処女のまま命を失ったオナゴも多く 13 たことだろう。 なんと勿体なきことか

……恐らくその好色さが祟り、 破門されたのだろうと俺は推測している。

真面目そうな顔をしているくせに、 その実、 暇さえあれば若い女性と遊んでいる変態野

郎

13 るわけではなく、 剃さ つ てい るとのことだ。 あくまで本人 の主張であるが

ちなみにこのつるつるの頭は東方の聖職者の規律によるも

のだそうで、

「っ……何か近づいてくる……。恐らく、魔物だ……」

そのときディルが小さく警告を口にし、 俺たちはすぐ に臨 戦態勢を整えた。

「ビッグボアか」

れたのは巨大ない の魔物だ。 鋭 い牙を突き出しての 強烈な突進が危険な魔物である

が、 それさえ気を付ければそう対処の難しい相手ではない

を有していたりするため、その辺りの注意が必要だった。 ただこの魔境の魔物は、 一般的な個体と比べて高い能力を持 5 7 11 たり、

変異が起こることがある

のだ。

見たところ目

0

Ŕ 通常のビッグボアよりも少し体毛が赤い気がする。

魔力濃度の高い場所にいると、

「デ**オ** トソ

「ブフォッ!」

ビッグボアは興奮 したように鼻を鳴らすと、 挨拶 わ 'n とばか ŋ に突っ込んできた。

俺たちは咄嗟に左右に散り、それを回避する。

おおおお

·つ!

そして瓦礫に頭から激突したビッグ喰らいなさいっ! ファイアジャベ リンっ!」

突進を躱し ノボア ,の尻へ、 すかさず攻撃を見舞った。

て、攻撃する。 これがビッグボアと戦うときの基本的な戦法だ。

仲間たちはそれを理解し、

耐久力の高

いビッグボ

アに確実に

ダメージを与えていった。

俺が指示するまでもなく、

普段は扱い ちなみに俺たちのパーティ うら い者たちばかりだが、 の陣形は、 主に俺とガイ こと戦闘となると非常に頼 が前 衛となり、 りになる連 魔法による遠距離 中 攻

撃が可能なハンナが後衛となる。

をする、い そし こてディ わば遊撃だった。 ルは、 気配を消して魔物 他の魔物の接近を警戒するのも の認識 か ら逃れ 0 つ、 状況に応じ 彼の重要な役目だ。 て臨機応変な動き

そんなディル が突然、 震える声で叫 んだ。

あのディルがここまで狼狽えるのは珍しい。 何か近づい てくる……っ! 何なんだ、 0) 凄まじ 11 気配 は つ

ルと鼻面を鳴ら しかも野 生の勘と言うべきか、 し始めた。 ビッグボアも急に動きを止

め

何

に怯えるようにブ

始めたのだ。 というか、 どうやら本当にとんでもない存在がこちらに接近してきているらし こう した感覚には鈍い はずの俺ですら察知できる。 なぜか身体が勝手に震え

て、 ・そい つは姿を現した。

「人間……?」

見た目は人間の青年のように見えた。白髪で目が赤いこと、 であることを除けば、 どこにでもいるような二十歳前後の若者である。 そして衣服があま Ŋ

ロボロ だがそいつが全身から発している凄まじい魔力。 それに晒されただけで身体 中

13 う汗腺から汗が噴き出し、 ガタガタと歯が鳴り始め やが った。

絶対的 のな強者。 格が違う存在。 敵対すれば死。

直感で理解できた。 俺は今、これまでの冒険者人生の中でも最大のピンチに遭遇して い

る、 کی

ブフゥ ツ !?

ッグボアが猛スピ ードで逃げて 13 った。 そ れを追 つ ħ か つ たのだが、 白

髪の青年はちらりと目で追っただけで動かなかった。 どうや ら目的は俺たちの方にあるらし 13

13 もしかしたらビッグボア同様、 見逃してくれるかも……

そのときだ。 青年の唇が微かに動く。

::

今、何か言ったのか? まったく聞き取 れなか った。

「(おい、何て言ったのか分かったか?)」

俺はディルを見やり、 目でそう訴えた。彼はそれに気づい てくれて、 小さく呟く。

「オレには…… *、こ、までしか、* 分からなかった……」

٠ ر殺す、 か?

どうやら見逃すつもりはないようだ。

それにしても、Bランク冒険者である俺たちが、 何者なんだ? 白髪と赤い目を除けば、 普通の人間の青年のように見えるが……。 魔力だけで圧倒されるほどのこい つは

「……アンデッド、 であろう」

普段は常に冷静沈着なはずのガイが、 掠れた声で言った。

アンデッド、 だと?

俺の知るアンデッドは、 例えば腐っ た肉体で動き回るゾンビ、 骨だけと化したスケル

ン、それから霊体となって人を襲うゴーストなどだ。

たデュラハンなどが有名だ。 17 はより高位のアンデッドとなれば、 吸血鬼だったり、 首を無くした騎士の姿をし

11

吸

Í

鬼なら牙が生え、

b

つ

0

しかし目の前の白髪はそのどれにも当て嵌まりそうにな

と青白い顔をしているはずだからな。 そしてアンデッドは総じて太陽光に弱く、 中には陽光を浴びるだけで浄化され てしまう

場合もあるという。 高位のアンデッドとなると耐性を持つそうだが、 それでもこんな風に日中に活動するこ

とは稀だった。

「恐らく、

相当高位

0 ア

シ

デ

ツ ۲ ::

か

し拙僧にも、

そ

の底がまっ

たく 計 ŋ

知

ガイはアンデ ッドに詳 しい聖職者だ。

そんな彼が「底が知れない 」と戦慄するほどのアンデッドだと……。

だが大人しく殺されてやるつもりはない。

·俺たちが奴の注意を引く。ガイはその間に幸いガイはアンデッドに効く浄化の術を持って ガイはその間に発動の準備を進めてくれ」 13

45承知]

なると 俺は愛用の戦斧を強く握り締める。 いう特殊効果が付与されており、 超重量の武器だが、 実は女子供でも扱うことができる代物だ。 持ち主が手にしたときだけ

さらに俺は闘気を刃に伝えていく。

この状態で俺が本気の一撃を放てば、 その直撃を受ければ一溜ま
及てば、強固な城壁すら粉砕 できる自 信 が つ

幾ら高位のアンデッドと言え、 溜まりもない はず

そのとき、 アンデッドが「にやり」と不気味な笑みを浮か べた。 まるで 「やって

貴様の攻撃など効かないぞ」とでも言うかのように。 舐めやがって!

やってやろうじゃ ねーか!

「うおおおおおおおおおおおっ!

先ほどの余裕を証明するかのように、 俺は怖気を振り払うように雄叫びを上げ、 アンデッドはその場から動こうとすら アンデ ッド -へと躍 ŋ か か つた しな

俺は渾身の力で戦斧を振り下ろした。 超重量の刃がアンデッド の頭部へ ばぎんっ

. は ?

俺は敵前だとい うの ĺ, 目を見開 13 て呆然とするしかな か · た

これまで幾多の 魔物を叩き潰しても刃毀 れ つしなかった、 ミスリル合金製の戦斧だ。

しかも闘気で刃を覆い、 さらに強度は増していたはず。

なのに、 その刃が砕け散ったのである。

驚愕すべきはそれだけではない。 頭部に直撃を受けたというのに、 V つはまっ

0 無傷なのだ。

化け物っ……」

そして負った怪我が自然に修復していくなど、 アンデッドは基本的に痛覚を持たないため、 腕を切断されても構わず襲 高 い再生能力を持つアンデッドも多い 弘い掛 かっ てくる。

しかし、 そもそもダメージを与えることすらできないアンデッド など初めてだ。

アレク、 退いてっ!」

ハンナの怒鳴り声で、 俺は我に返 つった。

そうだ。 まだ戦闘中なのだ。 呆然として動きを止めて 13 る場合ではな

メテオファイアっ!」

俺が慌てて飛び退いた直後、 炎の塊がさながら隕石 のように高速で通過していっ

ズゴオオオオオオンッ

アンデッドに炎塊が直撃する。 高々と火柱 が上 が ŋ そ Ò 熱風だけで俺まで火傷しそう

だった。……ハンナのやつ、 しかもあれで魔法剣士である。 また威力を上げやがった。 やはりもうCランクの V ベ ル んではな

っ……あたし Ŏ 全力の魔法が、 無効化された……っ

だがそんな ハン ナの渾身の魔法も、 アンデッドには通じなかったらしい。 炎に巻かれ

がらも平然としているのだ。

やがて炎が収まったとき、 アン デ ッド は 火傷 _ つ 負 6 Ź V な か った。

その背後に、 V つの間にかデ 1 ルの姿があった。 俺たち仲 間にも察知 بخ な 11 ほ

練の隠密スキルで気配を消し、アンデッドの背中を取って 17 たのである。

ディルが手にしてい るのは極太の針だ。 一点集中 。 一 撃は 竜種 の鱗をも 貫く ほどで、 さ

らに針には特性の猛毒が塗られている。

ろを、 あの毒は大型の魔物にも効く。 俺は何度も見てきた。 気づかれ ずに接近し ては 刺 で危険な魔物を葬るとこ

もちろん毒がアンデッドに効くかどうか は分 から Vi

その前に果たして針が通るのだろうか?

アンデッドが振り返った瞬間を狙い い、ディ

ルは針 を突き出 した。 針の先端が吸い

るようにして向 かった先は、 眼球だ。

そうか。 柔ら かい眼球であ れば貫けるか もし n な 0

ばきんっー ……しかし期待は裏切られた。 針の方が折れ てしまったのだ。

さすがにこれはディ ルにとっても想定外だったらし

そのときだ。 つい に術の準備が完了したようで、 ガイが後方から走り込んできた。

手にした棍が浄化の光に包まれ、煌々とした輝きを放っている。

滅せよ! かああああああっ!」

光の柱がアンデッドに降り注いだ。

俺たちは祈るような心地でそれを見守る。 もし、 これさえも効かなかったとしたら……。

て光が収まったとき、 俺たちは目を疑うしかなかった。

····・これが、 効かぬとは……」

マジか…… 高位アンデッドすら浄化する、 ガ イ 0) 祓 がまったく効 1/1 てね えなん

何なの よっ、 この化け物は……っ?

.....絶望、だ」

そこにいたのは、 化されるどころ 何 事もなか つたか のように立つア ッ

俺たちの全力の攻撃が、まったく通らな いなんて・・・・・

や打つ手はない。 こんな化け 物に出会ってしまった時点で、 俺たちの敗北は

61

たのだ。

仕かけてはこないということだ。 しかし不可解なのが、 これだけ一方的に攻撃されたというのに、 アンデッドは未だ何も

それどころか、またしても不気味な笑みを浮 か べてて Vi

くっ……俺たちなど、

あるい 死んだ方がマシだと思えるほどの苦痛を与え、 いつでも殺すことができるということか。 じっくりと楽しんでから殺す

つもりなのかもしれない 0

つひい つ

俺と同じ想像をしたのか、 ハンナが引き攣ったような悲鳴を漏らす。

彼女も冒険者の道を選んだ以上、 いつでも死ぬ覚悟はしているはずだ。 だが

玩ばれることになるなど、 さすがに考えてもみなかっただろう。

……そんなこと、 させるかよ。

は意を決し、懷に手を突っ込んだ。そこには魔法袋と呼ば れる魔導具が入 非常に高価だが つ

ここには外から見える何倍もの容量を保存することが可能だった。 ていると冒険にかなり役立つため、ローンをしてまで購入した代物である。

右手が摑んだのは、 ひんやりと冷たい拳大の結晶だった。

一か八かっ、 ر، ح つを使う……っ!」

こいつはとあるダンジョンの奥深くで発見した、 特殊な魔法が込められ

とその効果を発揮し、魔法が発動する。 鑑定士に視てもらったところによれば、

この 結晶 ごで発動 できる魔法は 異界 0 魔物を強

制召喚するというものらしい

しかしどんな魔物を召喚するかも分からなけ

れば、

召喚した魔物をコ

П

ともできないという。完全に博打なアイテムなのだ。 危険過ぎて使う機会などないと思ってい たのだが、 売らずに取って お 1/2 てよ か つ

下手をすればさらに状況が悪化するかも しれないが 現状を打開するにはもはやこの 丰

かなかった。

パリンッ! 結晶が ア [´]ンデ ッド の足元で割 n た

しかしそのときにはもう、 何が現れるの かを確認する間もなく、 俺たちはその

力で遁走していた。

オオオオオオオ ッ

51

のような下半身を持つ真っ赤な悪魔の姿があった。

凄まじ い雄叫 びが聞こえてきて、 走り ながら思わずチラ っと振り返ると、 そこには 羊ぎ

その強烈な存在感だけで分かる。 あ れは間違いなく上級悪魔だ。

そして幸い なことに、 その悪魔はア ン デ ッドに襲い か かろうとしていた。

次の瞬間、悪魔の下半身が爆発四散していた。このまま両者が戦っている隙に―――バァンッ!

:....は?

「「「はあ、はあ、はあ……」」」

一体どれぐらい走り続けていただろうか

身軽で最も体力のあるディルですら息を荒らげて いる。 持久力に乏し 13 俺に至っ

今にも心臓が飛び出しそうなくらいだった。さすがにもう限界だ。

ようやく走るのを止めた俺たちは、恐る恐る後ろを振り返った。

遥か遠くに滅びた都市の防壁が見えている。 あそこから俺たちは止まることなくずっと

走り続けてきたのだ。そして――

……いない。 あの白髪のア ンデ ッド の姿はどこにもなか つ

だがすぐには緊張を解くことはできなかった。 呼吸を整えつつも、 じばらく ・周囲を警戒

して身構える。

「……撒いた、のか?」

「というより、 そもそも追いかけて来なかったようだ……」

そこで初めて、俺たちは安堵の息を吐いた。 忘れていた疲労が押し寄せてきて、

その場にしゃがみ込んでしまう。

「一体、何だったんだよ、あれは?」

「……とんでもない化け 物であった。 もし向こうから攻撃されて 11 たら、 間違

の命はなかった」

俺は先ほど見た恐ろしい光景を思い返す。

召喚されたのは、明らかに上級クラスの悪魔だった。

たった一体で小さな都市くらい壊滅させてしまえるほどの 凶悪な力を持ち、

ンクの冒険者であっても容易には討伐できない強敵だ。

それが、あのアンデッドに一撃で瞬殺されてしまったのだ。

まぁ不幸中

-の 幸

11

つ

て

やつだが

「……もしかしたら」

気なハンナもよほど恐ろ しか ったのだろう、 い顔をし て言う。

53

見逃したんじゃ なくて……そもそも逃げても意味がなく Ċ実は 11 つ でもあたしたち

なんて殺せるのかも……」

耳が痛くなるほどの沈黙と重苦しい空気が辺りを支配する中、俺は努めて平静を装 ハンナの推測を否定することができず、俺たちはぶるりと身体を震わせた。 0

て、皆へ告げる。

とにかく、すぐに街に戻るぞ。ギルドにこのことを報告しねぇとな」

と

「それがいい……。そして街の中にいれば……さすがに奴も、 おいそれとは手を出せない

そう意見を一致させた俺たちは、

疲れた身体に鞭を打ち、

再び走り出した。

9月19日発売のファンタジア文庫で!

©Shichio Kuzu, Chiwawamaru 2020